

# 身体と喩え

## ——江戸の養生言説における身体認識（下）——

### Body and Analogy ;

#### The Epistemology of Body on the Discourse of Personal Health in the Edo era(2)

片 瀧 美穂子

Mihoko KATAFUCHI

2006年10月10日受理

はじめに

- 1 天地と身体
  1. 1 天地の相似物としての身体
  1. 2 気と天地=身体
- 2 植物と身体
  2. 1 養いの対象としての植物と身体
  2. 2 人為の思想（以上、2006年 第56集）
- 3 家と身体
  3. 1 社会的機能単位としての家と身体
  3. 2 物理的構造物としての家と身体
- 4 喩えの飽和
  4. 1 表象化あるいは微分化される身体
  4. 2 人為から記号へ

おわりに（以上、本稿）

### 3 家と身体

#### 3. 1 社会的機能単位としての家と身体

身体の家の喩えのあり方には二つがある。一つは、社会的機能単位としての家への喩えであり、もう一つは、物理的建築物としての家への喩えである<sup>1</sup>。前者の身体の社会的機能単位としての家への喩えは、養生が家の存続や発展に繋がることを語る中で、十八世紀以降とりわけ十九以降の養生論に登場してくる。後に引用するように、本井了承『長命衛生論』、中神琴溪『生々堂養生論』、鈴木朗『養生要論』、水野澤斎『養生辨』、同じく水野『養生辨後編』などの中に、身体が社会的機能単位としての家に喩えられていることを見ることができる。これら以前にも養生書は刊行されているが、こうした記述を見つけることはあまりできない。十六世紀末にまとめられ 曲道瀬道三が毛利基成へ授けた『雖知苦齋一溪道三言上目録』や、養生の心得を一二〇種の歌に構成した同じく曲道瀬道三の『養生誹諧』にも、家に関する記述そのものが登場することはないし、近世養生論の嚆矢とされる曲道瀬玄朔『延壽撮要』や『雖知齋養生物語』にも、それを見つけることができない。

社会的機能単位としての家に喩えられるためには、身体が家においてその存在が規定されることが必要である。十八世紀初めに出された代表的養生論とされる

貝原益軒『養生訓』や香月牛山『小児必用養草』においても、社会的機能としてであれ、物理的な建築物としてであれ、身体が家の喩えはまだ登場してこない。ただし、貝原益軒『養生訓』には、身体が家に喩えられている箇所は見当たらないが、身体はまずその冒頭において「天地父母」の相関で語られている<sup>2</sup>。

人の身は父母を本とし、天地を初めとす。天地父母のめぐみをうけて生まれ、又養われたるわが身なれば、わが私の物にあらず。天地のみたまもの（御賜物）、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天然を長くたもつべし、是天地につかへ奉る孝の本也。身を失ひては、仕ふべきやうなし。わが身の内、小なる皮はだへ、髪の毛だにも、父母にうけたれば、みだりにそこなひやぶるは不幸なり<sup>3</sup>。

同様に、香月牛山『老人必用養草』の序において、北可昌識は、「其父母没後、身是父母遺體、而我身即父母體則、養我身如養父母、敬我父身如敬父母而可矣」<sup>4</sup>と述べ、父母の没後は、自らの身体が父母の遺体なのであって、父母を養うように自己の身体を養うことを説く。ここでは、「父母の遺体としての身」が提示されている。身体の社会的機能単位としての家への喩えは、多くは十九世紀に登場しているが、十八世紀に入ると、身体は社会的な単位としての家に繋がるものとして、言い換えると、「父母」から受け継いだ身体であると語られはじめるのである。貝原益軒『養生訓』や香月牛山『老人必用養草』は、きわめて現実的な日常生活の中での養生法を展開している。そのため、こうした養生言説を通じて、日常生活においてそのあり方を自らで感じる身体が、「天地父母」との関係性の中に存在づけられていくことになったであろう。三宅建治『居家保養記』（出版年不詳）は、その書名からして「家」と「保養」との関連が明示されているが、貝原益軒『養生訓』と同様、次のように身体を父母の遺体と位置づけている。「人の此の身あるは、天の賜、父母の遺體にして、子孫にその蹟を残すものなり、自からみだりにして、そこなふべきものにはあらず」<sup>5</sup>。天地父母の遺

体である身は、子孫にまた伝えられるものであるから、みだりにしてはならないという。父母の遺体としての身体と捉えられることによって、その父母の遺体が生み出される「家」へ関心が向けられている。

では、「家」意識はどのように近世において展開したのだろうか。大藤修の議論をもとに整理してみたい<sup>6</sup>。拡大された総本家の「家」意識のうちに包摂されていた分家筋の小農民も、主体的な「家」意識を持つに至るように、近世を通じて、武士や商家だけでなく、農民の間にも「家」意識が広がっていく。同族という「家」の觀念の精神的靱帯をなしていたのは、同族共通の祖先＝同族神に対する崇拝であったという。小農民たちも、自己を先祖と子孫の間の時間軸の中で位置づけ、自己の家の発展への貢献の意識をもった。家内奴隷として主人に使用されていた下男や下女も自己の家を形成し、夫婦が力を合わせて家業を営み、死後は先祖として子孫に永続的に祭祀されるようになったのが、江戸時代である。「家業」や「家産」の重要性はこうした「家」意識と深く絡んでいる。以上が大藤の議論であるが、本稿に関連づけて考えると、養生における「天地父母」の遺体としての身体もまた、「家業」や「家産」と関連づけられた「家」意識のうちに回収されていくものであっただろう。社会的機能単位としての家に身体が喩えられるのは、多くは十九世紀以降であるが、すでに貝原益軒『養生訓』は次のように述べて、養生を家業に位置づけていた。

四民ともに我が家事をよくつとておこたらず。士となれる人は、いとけなき時より書をよみ、手を習ひ、礼樂をまなび、弓を射、馬にのり、武芸をならひて身をうごかすべし。農・工・商は、各其家のことわざ（事業）をおこたらずして、朝夕よくつとむべし。…四民ともに家業をよくつとむるは、是皆養生の道なり。つとむべき事をつとめず、久しく安座し、ねぶり臥す事をこのむ、是大いに養生に害あり<sup>7</sup>。

身を「天地の賜」「父母の遺体」とした三宅建治『居家保養記』は、次のように述べている。「人としては、それぞれの家業あれば、男子は、その業を勤め、女子は女事をな習ふを専らにして、身を立つる時は、年に随ひ、男子は妻をもとめ、女子は嫁するの法あれば…」<sup>8</sup>。養生論は、江戸後期になれば農民たちにも読まれるようになるが、基本的には武士階級の家長に読まれることが想定されていた。読者層としては武士階級の家長が想定されていても、その養生に関する事柄がその他の階級においても適用されることを望むべく記述されていた。読者が家長に想定されていたのは、この時代の家長が家政全般に管理責任をもっていたからである。太田が指摘するように、近世においては、家事、子育て、医療、看病、介護に関する事柄は、家長

にその責任があったのである<sup>9</sup>。養生もまた家長が責任を負うべき家政に関わる事柄としてとらえられていたのである。

身体は「家」と関連づけて語られ、家の存続のための養生という図式が出てくることになる。また具体的に身体は、家のあり方に喩えられる。江戸後期の錦絵、一秀斎芳勝画「五体和合心臍之教訓」<sup>10</sup>は、物理的構築物としての家への身体の喩えともなっているが、両手、両足、頭、背中などをそれぞれ家の構成員と見なし、一致協力して働くことが心身のすこやかさに通じるという説明を加えている。鈴木朗『養生要論』は、身体の状態に合わせて生活の仕方を切り替えていくことへの必要性を、家業の経済的な営みに喩えている。

肥満大兵の人、壮健にまかせ、厚味酒肉を多く用いる者、五十以後元氣衰る時は、必中氣を病む、氣風に勝者は壽し、形氣に勝者は病、と唐人もいへり、たとへば商人の大商賣大身体の者、内證の金の減るが如し、金は人の元氣の如し、身體は形の如し、其時に切り替へと云事ありて、商賣を小さくし、間口をちぢめ、人をへらし諸事減少質素にして、凌ぎ越す事あるが如し<sup>11</sup>。

肥えた人で壮健さにまかせて、飲食を多く摂る者は、五十を過ぎて元氣が衰えると、必ず中氣を病んでしまう<sup>12</sup>。氣のありようが外形的な体格に勝るものは長生きし、外形的な体格が氣に勝ってしまう人は病になる、このように唐人もいっている。時に応じて切り替えるということが必要であって、商売を小さくして、事を質素にして過ごすことがあるようなものだ。このように述べられているわけだが、金銭が根本的な氣のようなものとまで述べられている。これは第一節において述べたようなコスモロジカルな身体認識からは、かなり隔たったものになっている。養生のありようが、経済的な喩えに用いて語られている箇所を、さらに本井了承『長命衛生論』から引用してみよう。

若時の元氣強にまかせて、身をおもうままに持、身弱なりて始めて心付保養するは、たとえば身上のよろしき時、おごりて金銀を費、貧なりてけんやくするがごとし、けんやくせざるよりはなしなれども遅て、其しるしすくなし。是人の身を立るも、家を守立るもおなじ道理なるべし、金銀澤山なるもつうかつやしなば、後にはへりてほぼしく成るべき、人のからだも達者をたのみにおもひ、色慾を氣ままにして不慎は、早弱なりて短命とならん<sup>13</sup>。

若い時に身体に配慮せずに過ごし、状態が悪くなって保養することが、金銭的に困窮してはじめて儉約するようなものだという、金銭的に豊かであれ散財して

しまったら、家に困窮をもたらす。人の身についても同じことが言えると説く。また、別の箇所では、身体への配慮をなす養生は、家の安定的な維持へとつなげられていく。

肝心は身を保事なるべし、身を保は身を大事にかけざれば成がたし、身を大事にかけけるは養生に在、養生は身おさまらざればできがたし、身をさまりて家ととのふ、家の本は身にして、身の本は父母也、我身を大事にかけけるならば、身の本たる父母を、大節におもはずんば有べからず<sup>12</sup>。

養生が家の安定的な維持において有効ならば、不養生は不孝であると述べられる。中神琴溪『生々堂養生論』は「不孝ノ不養生ナカラント欲スル時ハ則家ヲ治メザルベカラズ」<sup>13</sup>という。また、家業である農業の経営のあり方が、養生言説の中で語られることになる。

さて家を治むるには先其の文限相應の衣食住あるを足れりとして分外の利益を求むべからず、農夫ならば先己が家内の人数其老幼強弱の分量を計り、假令田十反畑三反は作らば作らるべしと思はば、田九反畑二反作るべし<sup>14</sup>。

江戸時代を通じて、家と身体との繋がりが養生言説において強められていった。養生言説は、家業や家産という経済的な営みの中で身体を把握し、かつ先祖と子孫とをつなぐものとして身体を提示したのであるう。

### 3. 2 物理的な構造物としての家と身体

前項で述べたような「家」意識の進展とともに、社会的機能単位としての「家」に喩えられるものとして、身体が把握されるのであれば、物理的な構造物としての「家」の身体喩えもまた登場する。物理的な構造物としての「家」は、社会的機能単位としての「家」を物理的なレベルで日常において対峙する空間だからである<sup>15</sup>。養生言説における、物理的構造物としての「家」への喩えもまた、身体の社会的機能単位としての「家」への喩えと同様、十八世紀に入ると登場し、十九世紀以降はさらに多くなる。寺島良庵『和漢三才図絵』には、すでに以下のように、身体を建築物としての家に喩えてみせている。第一節で引用したように身体天地の喩えにひき続き、以下のように述べている。

今又之れ家室に譬ふ。管見するに恐くは齟齬ひ有るか。頭は則ち棟、足は則ち礎、骨は則ち柱、肉は則ち壁、筋は則ち縄、毛髪は則ち薈、口は則ち門、眼は則ち窓、血は則ち井水、三焦は則ち墩牆、膀胱

は水溝、命門は則ち柴薪、肺は則ち玄関、大腸は則ち裏の門、肝胆は則ち決断所、小腸は則ち庖厨、腎は則ち金銀〔本水に属すると雖も仮に之を金銀に譬ふ〕、脾胃は則ち米穀、心は則ち主人なり。能く治めて過不及無きときは則ち家斉い、財足る。蓋し米穀は日用の命根、金銀は万物の宝基なり。放之を敗失する者は、天年を終ふべからざるのみ<sup>16</sup>。

寺島良庵は「今又之れ家室に譬ふ。管見するに恐くは齟齬ひ有るか」と述べていることから、十八世紀前半において新たに、身体の家への喩えが語られるようになった、あるいは受け入れられはじめたと考えられる。少なくとも、寺島良庵『和漢三才図絵』が記述されたと思われる十八世紀初頭においては、身体が家に喩えられることが多くなされていたわけではないということが分かる。引用の後半部分は、社会的経済的な営みを行う「家」にも関連づけられ、「之を敗失する者は、天年を終ふべからざるのみ」という部分は、養生言説を思わせる。そして、養生と家、人と家の喩えは、十九世紀前半まで続いていく。病を火事に、病に侵される身体を家に喩え、平生の養生をしていれば「酷烈の氣」に遭い、患ってしまっても、その後の回復が順調であると述べているのは、三浦梅園である。

又體から體に傳ふるは、疥毒の類なり斯る類は、其細縊の感應にて、病の軽重深淺分る事なれば、其の酷烈の氣にあへば、火事の様なものにて、平生営衛の調護なき時は、空宅に火かかれる如く、ふせぐ人なければ、消べき様なし営衛調護よろしとて、酷烈の氣に應ずる時は新宅に火かかれる如し、養生好しとても強壯なりとても、通れ難き處なり、されども平生養生よく、又稟受厚き人は少しく恢復の萌しを得れば、生氣勃勃として、成康一旅の師、一成の田、再度夏の天下を復するが如し<sup>17</sup>。

病＝火事という捉え方は、中神琴溪『生々堂養生論』にも出てくる。「火事は家居の大病なり、若し表口より火燃かかるは病のつきたる時なり、此時の療治は庇を引放し或は水を灌ぎ或は打崩しする攻撃より外なし」<sup>18</sup>。江戸時代にはしばしば起きていた火事は、誰もが何がしかは経験する病に喩えられたであろう。

別の例をあげると、水野澤齋は、虚弱な人間と壮実な人間は、それぞれ違う種類の材木による柱に喩えて、養生することの有効性を説く。

人の養生は住所する家に同じ、虚弱なる者はたとへば松杉のごとし、壮実の者は榲桲の柱のごとし、松杉の柱は朽安く保がたし、然れども朽たる度毎に根次すれば長久する者あり、榲桲の柱は久しく保つ

者なれども、数十年の後朽ちずということなし、其朽たる時に根繼せざれば必ず傾き弊るなり、人に有りても又同じ、不養生の人は常に病を恐れず、少の事は打捨て根繼せざる故大病急死頓死などの卒病あり、養生家は少の事も怖て造作するゆゑ大病なく三日と寝る事なし<sup>19</sup>。

物理的構造物としての家全体ではなく、部分的な箇所が身体に喩えられる場合もある。例えば、常に動いている戸は虫がつかないため、これと同じように身体を動かすべきであるというたとえ話は、古代中国の養生書にも登場するとされるが、この引き戸のとまらと身体喩えは、香月牛山『老人必用養草』、三浦梅園『養生訓』、本井了承『長命衛生論』など、いくつかの養生書で見つけることができる。十八世紀以降、このたとえ話が養生言説の中で取り上げられることになった。本井了承は以下のように記述している。

戸樞は常に動くゆへに虫いらず、朽ざるといへるにて、其外道具衣類にても、常にうごかせば、くちず虫いらず、つよく動ば破損、人のからだも労働身をこなせば、腹よくすき食味甘氣血よく順て、病おこたらずといへす也。然共あらく遣強労働ば勞傷ゆへ、程よくなしてくるしまぬよふにすべしといへるなり<sup>20</sup>。

水野澤齋『養生辨』には、灸は柱の貫の楔のようなもので、家が傾かないようにするのが楔であるように、病になる前にするものが灸であると説明し、灸を楔に喩えている箇所がある。

或人間、病ありて醫家へ療治を頼ば大体灸はあし、といふいかなる譯ぞ、答ふ灸は柱の貫の楔におなじ、病の出まへに灸をするは家の仕ぬ前に楔を締が如し俗に仕ぬ前の杖と云是なり、又病が治りて後に點る灸は仕れたる家を真直に起して楔にて堅めるがごとし、灸は體の楔なれば病なりに堅りては人並の體にはならず、俗に灸を點ると薬が効ぬといふ是なり<sup>21</sup>。

また別の箇所では、風呂を身体に見立てる。

一鉢の風呂を人の鉢と見、中の湯を人の津液と見、箱の裏面の天井を人の肺と見、下に焚火を胃熱心熱肝熱と見る、胃心肝の三熱の火を以て、津液の湯を焚立るときは津液が湯氣と成て、肺の天井うらへ上る是則ち痰なり、たとへば薬を煎ずるに二合の水を一合に減す、其減し一合の水は薬罐に吸込にあらず、皆湯氣と成て空へ上るごとく、胃心肝の三熱の為に総身の津液を蒸たて湯氣成て上へ騰り肺に粘着が痰

なり<sup>22</sup>

ところで、灸という治療法は、気が集中し、出入りする箇所である経穴を刺激することによって、物質＝エネルギーである気の流れを整えていこうとするものである。また、後者の引用に登場してくる、胃熱、心熱、肝熱、津液、なども中医学の概念である。中医学は、物理的に存在する骨格や臓器に注目するよりは、身体のとらえもつ関係性や機能を重要視する。それら関係性や機能は、身体の部分の形、大きさ、配置によって決められるものではないと考えられている。重要なことは、身体天地とも通じる気の身体内における充満と循環なのである。こうした中医学をもとにした、灸についての言及や、胃熱、心熱、肝熱、津液、といった概念が、柱や風呂に喩えられることによって、身体把握のありようはどのように変容していくのだろうか。次節では、このことを考えることから始めよう。

#### 4 喩えの飽和

##### 4. 1 表象化あるいは微分化される身体

具体的な身体部位が、家の部分に喩えられることは、身体が個別の要素の集合体として、物理的に構成されているという発想へと通じていく。これは、結果としては、大きさや色といったそれぞれの形態とその固定的な配置という限定性をもつ、要素の集合体としての身体という解剖学的把握と通じることになった。図1「飲食養生鑑」と図2「房事養生鑑」は、その身体内部が人の活動の集合体となっている、解剖学の養生論的解釈とでもいえるべき身体の表象である<sup>23</sup>。また、家は家長を中心にして、複数人の人間が集まって成立する。よって、家が身体になぞらえるとき、家＝身体は、人＝身体集合として表象されていくことにもなる。例えば、作者不詳「目鼻口耳足」（江戸後期）の絵は、人間の頭の部分がそれぞれ目、鼻、口、耳、足として擬人化された身体各部は、自らの重要性を語っている。身体は、目鼻口耳足といった各部から成り立つが、その各部は人間＝身体化されて表されているのである。こうして身体集合が身体を表象するようになっていく。

図1「飲食養生鑑」と図2「房事養生鑑」、これら二つの錦絵は、解剖学の養生論的解釈とでもいえるようなもののようである。「飲食養生鑑」は以下の文から始まっている。「序云、凡、人間の貴人高位といふも下賤の身も、又賢も愚かなるも、はらの中にそなへたる臟腑此ごとし」。すべての人間は、貴賤や賢愚に関係なく同じ臟腑を持っているというのである。腹の中に身分の違いは反映されず、万人が同じというこの謂は、近代の物理的な身体把握を思い起こさせる。これらは、「実は胴体の内部はこうなっているのだ」と指摘して

もいるのである。確かに、これら二つの錦絵は、『解体新書』を機に十七世紀末以降広がっていく解剖学の知識をうけている。例えば、「房事養生鑑」には子宮の左右に卵管と卵巣が描かれているが、これは『解体新書』以来の知識である<sup>24</sup>。しかしながら、他方でそこに展開されているのは、擬人化された臓と腑であり、漢方医学的説明がなされている。例えば図1「飲食養生鑑」では、肺については以下のようなものである。「金にぞくし、いろ白なり。はな、又、大てうへつうずるのミち也。ハツの葉のういに廿四の穴有て、おゝくのくひもの、又、のミしる、ミな此所にてさばく也。これをそうでんのくはんといいて、いろいろなるしょくもつおさめ、五ぞうの気をめぐらすゆえ、第一のところなり」。また心についてはこうである。

心ハ、火にぞくし、いろ赤し。舌、くちをつかさどる也。右はいの下、かくまくのうに有て、小てうにつうず。そのかたちハ、はすはなのミのごとく、その中に穴有て、おゝく、又、すくなき有て同じからず。これより四つのつつありて、じん△かん△ひ△△ひ△△とうの四ぞうにつうずる君主のくはんにして、しんめいを出し、ひろくのりをそなへ、万事につやうする大事の所なり

これら説明は、陰陽五行に基づいて考えられた中医学の説明である。そのため、蘭学の知識が入ってくる以前の、例えば寺島良庵『和漢三才図会』の巻十一経絡部における肺、心の記述とも内容的に重なっている<sup>25</sup>。図2「房事養生鑑」では、肺ではふいごによって息が心の臓に送られている様子が描かれているが、『和漢三才図会』においても次のように、肺はふいご（橐籥）に喩えられて記述されている。

肺の形、<sup>よ</sup>四もに垂れて背の第三椎に附着す。六葉<sup>すべ</sup>而耳凡て八葉。其の葉白宝を以つて諸蔵を覆ふ。…一吐一吸、消息自然清濁の運化を司り、人身の橐籥と為す。中に二十四の空有り、陽中の太陰にして竅を鼻に開く<sup>26</sup>。

心の形が蓮花にているという、心についての記述もまた図2「房事養生鑑」と重なっている。

心は君主の官。神明<sup>これ</sup>焉より出ず。肺管の下に居り、隔膜の上背の第五の椎<sup>ひら</sup>に附着す。心は神を蔵むることを主る。…形未だ敷かざる蓮花の如し。其の中に竅<sup>あな</sup>有り。多く寡なく同じからず…共に四系有り。以つて四臓（肝・腎・肺・脾）に通ず<sup>27</sup>。

これらの絵には、肺を覆っているはずの肋骨が全く描かれていないように、骨格や筋肉ではなく、陰陽五

行の説明が加えられた、胴体の内部の五臓六腑にまなざしがむけられている。そして、胴体内部の臓と腑の機能は、擬人化されている。図1「飲食養生鑑」に描かれた男と図2「房事養生鑑」の花魁とおぼしき女の内部には、人が活動している。肺でうちわを煽いでいる男たちはこう会話している。

へうちハのほねもおれるが、又、からだのほねもおれるいやうだ。ちつとやすもうじやねへか。

へうちハらんミやくだ、なぞといハれちや、わるひから、なんでも、ほねおつてから、やすみやせう

心では、奉行らしい男とその部下らしい者が、会話をしている。

へ心ハ第一の所てござるから、どふも、ぎんみをよくいたし、ちつてもとゞこふりなく、つうやうをよくし、こまらぬやうにいたすやくだが、とかく、らんぼうがおゝくて、こまりはてるテ。

へさようでごい升。

身体の内には臓と腑があるが、それらは人=身体に喩えられている。人=身体<sup>28</sup>の集合によって、身体は表象されているのである。集合する人が多数になれば、身体は家以上に大規模なものに喩えられうる。図1「飲食養生鑑」は、体内（胴体）を一都市に、図2「房事養生鑑」は体内（胴体）を郭に、それぞれ見立てている<sup>28</sup>。都市は、多くの人間が生業と営みながらその空間に存在する。郭には花魁はもちろん、下働きのもの、主人、その他の人間たちがそこに働いている。どちらも、人の集まりであることには違いない。小さな身体<sup>29</sup>の集合が、大きな一つの身体と構成する表象は、これまでに論じてきた図1「飲食養生鑑」、図2「房事養生鑑」だけではなく、他にも見つけることができる。歌川国芳（1797-1861）の作品は、多くの身体によって一人の身体、顔をあらわすものが多い<sup>29</sup>。図3「寄り合い人となる」は、麻疹の流行時に悪影響をうけてしまう商売（相撲取り、芸者、そば屋、髪結い、魚屋等）の多くの人間を、パズルのように組み合わせる一人の人間に仕立てている。身体<sup>30</sup>の集まりが別の一身体を表象しているのであるが、さらに集まって表象されるものは、人間の身体ではなく他のものも登場してくる。江戸時代末期安政五年のコレラ流行に際して描かれたと思われる、作者不詳「通神鳥」<sup>30</sup>は、コレラによって儲かる職業（火葬場、僧侶、按摩など）の人間たちを集合させて、一羽の鳥に仕立てている。コレラによって、金を「つかみとる」人々の集合が、語呂を合わせて鳥として描かれている。

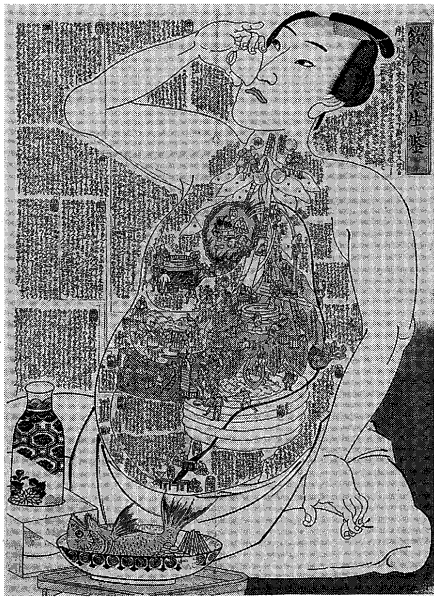


図 1



図 2



図 3

#### 4. 2 人為そして記号へ

社会的機能単位としての家であれ、物理的構築物としての家であれ、身体が家に喩えられることは、「気が巡り流れる身体」という中医学における身体把握からは、かなり遠ざかることは間違いない。植物の場合、その生命を保つものは、身体と同じ物質＝エネルギーである気であった。確かに、栽培される植物に身体が喩えられるとき、肥料や水やりといった人為的な操作が栽培される植物には加えられるため、天地と繋がる身体という身体把握と比較すれば、コスモロジー性が薄れている。しかし、天候や土地の地形に如何ともしがたく左右されることも確かである。天地、植物、どちらにおいても身体が喩えられるとき、そこには気が介在していた。しかし、物理的構築物としての家は、外界の環境から遮断をしようとするものである。家を構成するものが、木や紙や土といった天地の気の流れの中から生じたものだとしても、家が建つまでには多くの人為的な操作と加工を経ているのであり、そこに気の流れがみだされるものではない。家は、コスモロジカルな作用によって変化を被るものではないのである。

家を構成する人＝身体から出発して、人＝身体は集合することにより、別の身体を表象し、さらには洒落をきかせた語呂合わせによる架空の鳥までも表象可能なものとなった。人＝身体によって、それが集合せずとも多様なものが表象可能となり、様々なものが擬人化される。こうした中で、解剖学的な身体把握や近代的な病観をも取込みながら、身体はあらゆるものが喩えられうるものとなった。麻疹よけの呪や、養生法を教えるものとして錦絵が多数版行されたが、その中の図4一英斎芳艶「はしかのまもり」(1862)、および図5一英斎芳艶「はしかまじないおしえ宝」(未詳)には、麦と飼馬槽と金柑が人＝身体として描かれている。幕末には麻疹を広める悪神として酒吞童子が描かれたが、図6芳幾「麻疹送り出しの図」(1863)は、麻疹を広める酒吞童子を俵に乗せて送り出している図であるが、酒吞童子を担いでいるのは、擬人化された甘酒、金柑、など麻疹に良いとされた食べ物の身体である。江戸後期の薬の広告である図7一猛斎芳寅「薬の病退治の図」に描かれているのは、薬による病退治をあらわしているが、そこには「救命丸」「人参膏」「錦袋園」などの旗をつけた人＝身体たちが薬匙をもって、かんしゃく、あおすじ、せむし、ほうそう、なきむし、めまい、はやり風などの病＝鬼たちと戦っている様子である。病への対処が「戦い」に喩えられることは、病に対する近代的反応がそこまで来ていることを想い起させる<sup>3)</sup>。近世においては、はやり病が共同体をおそう時、そのはやり病をもたらし悪神が共同体から出て行くことが、そのはやり病の終息を意味した。村々にはやり病がおこると、それを追い出す「神送り」が行



われた。はやり病は、外へ出て行くべきものであっても、撲滅すべきもの、攻撃の対象ではない。図7「麻疹送出しの図」には、麻疹の悪神として酒吞童子が担がれているように、麻疹は共同体から追い出されるべきものである。麻疹は、ある共同体から出てゆくならば、さらに追いかけられ滅ぼされるということはない。しかし、図6「薬の病退治の図」には、病は身体から追い払う、出てゆくものではなく、戦い懲らしめる対象、打ち負かす対象となっているのである。上部中央部分には、「釈迦に提婆太子に守屋ハ薬種に病あるにひとしくされども邪道正法に敵せず其病ひによりて銘灸をもつて是を退治し無病息才になるハ…」と書かれている。邪法は正法に勝てない、適した薬を用いれば退治することができるというのである。病は追い出すのではなく、今や撲滅すべきものとなっているのである。

る。十九世紀以降においても、天地の相似物としての身体、身体、身体への喩え、家への喩えも養生言説に登場している。身体はさまざまなものに喩えられることによって、逆にさまざまなものが身体に喩えられる状況、身体、身体、身体があふれる状況がつくり出されたのである。

### おわりに

本稿で考察の対象としたのは、十七世紀から十九世紀中ごろまでの養生言説であったが、十九世紀中ごろに、気が流れる身体という身体把握が登場しないわけではない。逆にいえば、身体が多様なものに喩えられ、解剖学的な身体把握の養生論的解釈とでも呼べるようなあり方や、近代的な病観も存在しながらも、天地萬物を構成しつつ巡っている気という把握が存在しえ



図 4



図 5



図 6



図 7

た。気の把握が、近代医学的な語りの中に置き換えられる時、身体は別の知の編制の中に入ってくることになるだろう。十九世紀後半の養生や衛生の言説において、身体はさらに、国家、世界地図、時計にも喻えられることになる。これらの喻えを通じて、この気概念の消失と平行して、十九世紀後半になると、近代的国家像、地政学的に日本が直面していくこととからみ合いながら、数量化され物理的に把握される近代的身體が提示されていくことになるように思われる。近代的身體把握へと編制換えしていく身体の喻えの展開を、今後の課題としたい。

## 注

- 1 また、どちらの意味をも含んでいる場合もある。例えば、「心は身の主なり、身は心の家なれば、主ありても家なくば住居ならず、家ありても宅立ざるなり」。本井了承『長命衛生論』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第四輯』日本図書センター、1979、234頁。）
- 2 このことについては、松村浩二「養生論的な身体へのまなざし」『江戸の思想6』ペリカン社、96-117頁。
- 3 貝原益軒『養生訓・和俗童子訓』岩波文庫、24頁。
- 4 北可昌識「序」香月牛山『老人必用養草』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第二輯』日本図書センター、1979、3頁。）
- 5 三宅建治『居家保養記』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第六輯』日本図書センター、1979、111頁。）
- 6 大藤修「小経営・家・共同体」『日本史講座6』東京大学出版会、2005、1-32頁。
- 7 貝原、前掲書、35頁。
- 8 三宅建治、前掲書、（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第六輯』日本図書センター、1979、115-116頁。）
- 9 太田素子『江戸の親子』中央公論社、1994、参照。
- 10 青木、古田他編『目で見るくすりの博物誌』内藤記念くすり博物館、1990改訂、67頁。
- 11 鈴木朗『養生要論』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第一輯』日本図書センター、1979、141-142頁。）
- 12 中気とは、風気に傷つけられたものをさす。
- 13 本井了承『長命衛生論』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第四輯』日本図書センター、1979 p.288.）
- 14 同上、310頁。
- 15 中神琴溪『生々堂養生論』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第五輯』日本図書センター、1979、102頁。）
- 16 同上、102-103頁。
- 17 物理的建築物としての「家」の身体而喻えと、近世における住環境の構造上の変化との関係の有無については興味あるテーマであるが、本稿では論及しないことにする。
- 18 寺島良庵『和漢三才図会』（自序1712）（谷川健一編『日本庶民生活史料集成第二十八巻』三一書房、1980、242頁。）
- 19 三浦梅園『養生訓』（梅園会編『梅園全集下』弘道館 1912、269頁。）
- 20 中澤琴溪『生々堂養生論』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第五輯』日本図書センター、1979、113頁。）
- 21 水野澤齋『養生辨後編』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第四輯』日本図書センター、1979、102頁。）
- 22 本井了承『長命衛生論』（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第四輯』日本図書センター、1979、303頁。）
- 23 水野澤齋『養生辨』三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第三輯』日本図書センター、1979、343頁。）
- 24 同書、（三宅秀・大沢謙二（編）『日本衛生文庫第三輯』日本図書センター、1979、259頁。）
- 25 高山宏は、江戸を「視の文化」にのめり込んでいった社会ととらえる中で、『房事養生鑑』を取り上げて、次のようなキャプションをつけている。「『解体新書』の、人体を透徹して「見る」あまりに、そこに一個の自動機械を見てしまったく近代>の眼差しを『房事養生鑑』アナトミアはやんわりと喰いのめす」。（高山宏『黒に染める』ありな書房、1997、60頁。）
- 26 酒井シズ『絵で読む江戸の病と養生』講談社、2003、138頁。
- 27 寺島良庵『和漢三才図会』（『日本庶民生活史料集成 第二十八巻』三一書房、196頁）
- 28 寺島良庵『和漢三才図会』（『日本庶民生活史料集成 第二十八巻』三一書房、192頁。）
- 29 同書、197頁。
- 30 タイモン・スクリーチ『江戸の身体を開く』作品社、1997、特に第四章。またこれら二つの錦絵については、高山の他、酒井シズ『江戸の病と養生』講談社、2003、の中で取り上げられている。また筆者も拙稿「養生における身体認識一筋を孕む身体一」『スポーツ史研究』第15号、2002において取り上げたことがある。
- 31 歌川国芳のこうした作品について、高山は以下のように述べている。「マニエリスム浮世絵として近年とみに評価の高い歌川国芳（一七九七—一八六一）の残した奇想画のひとつは「合成された顔」という、マニエリスム戯画史ではおなじみの遊び絵であった。個が全体との関係を激しく意識をせざるをえないコラージュ文化のそれは自我像である」。（高山宏『黒に染める』ありな書房、1997、57頁。）
- 32 所蔵、順天堂大学山崎文庫。
- 33 柿下昭人『健康と病のエピステーメー』ミネルヴァ書房、1991は、ドイツおよび日本における十九世紀におけるコレラ流行と近代社会システムを論じている。また、社会システムと病の問題については、市野川容孝の一連の研究を参照されたい。